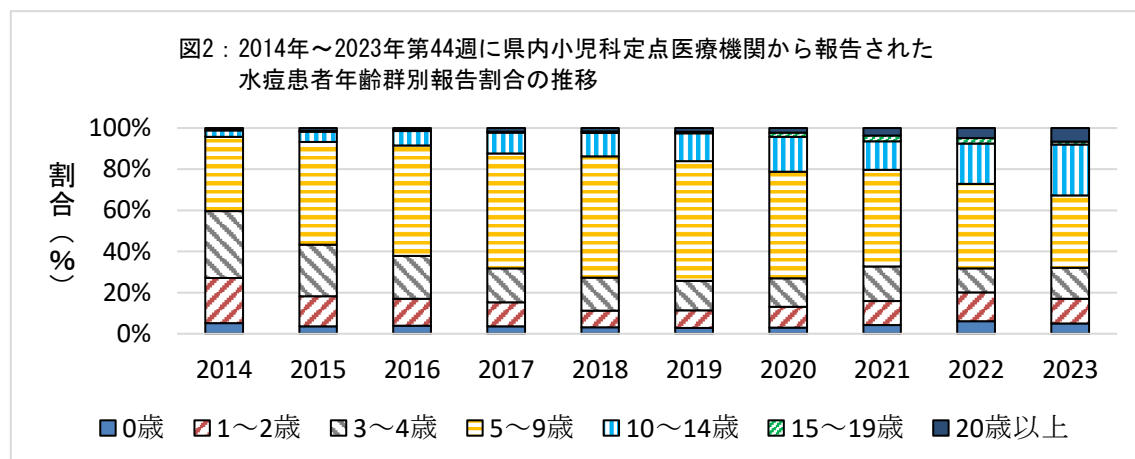
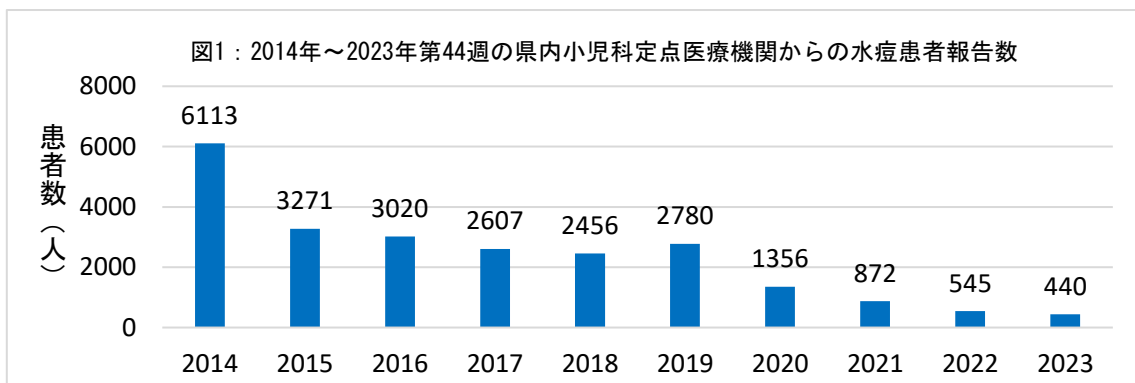


【今週の注目疾患】

《水痘》

2023年第44週に県内の小児科定点医療機関から報告された水痘の定点当たり報告数は0.14（人）であった。また、同週に県内医療機関から水痘（入院例）の届出が1例あり、2023年（第1週～第44週）の累計は12例となった。

2014年10月1日から水痘の予防接種は定期接種となり、以降、小児科定点からの水痘の報告数は減少している（図1）。特に、定期接種対象（生後12月から生後36月）が含まれる年齢群において報告数が減少し、現在では年長児～中学生を患者とする報告が主となっている（図2）。



水痘の潜伏期は2週間程度（10～21日）であるが、免疫不全患者ではより長くなることもある。成人では発疹出現前に1～2日の発熱と全身倦怠感を伴うことがあるが、子どもでは通常発疹が初発症状である。発疹は全身性で掻痒を伴い、紅斑、丘疹を経て短時間で水疱となり、痂皮化する。通常は最初に頭皮、次いで体幹、四肢に出現するが、体幹に最も多くなる。数日にわたり新しい発疹が次々と出現するので、急性期には紅斑、丘疹、水疱、痂皮のそれぞれの段階の発疹が混在することが特徴である。またこれらの発疹は、鼻咽頭、気道、膣などの粘膜にも出現することがある。臨床経過は一般的に軽症で、倦怠感、掻痒感、38度前後の発熱が2～3日間続く程度であることが大半である。成人ではより重症になり、合併症の頻度も高い¹⁾。

水痘にはワクチンがあり、現在国内では乾燥弱毒生水痘ワクチン（以下、水痘ワクチン）が用いられている。水痘ワクチンの1回の接種により重症の水痘をほぼ100%予防でき、2回の接種により軽症の水痘も含めてその発症を予防できると考えられている。水痘ワクチンの定期接種は、生後12月から生後36月（1歳の誕生日の前日から3歳の誕生日の前日まで）の間に2回の接種を行うこととなっており、1回目の接種は標準的には生後12月から生後15月までの間に行う。

2回目の接種は、1回目の接種から3月以上経過してから行うが、標準的には1回目接種後6月から12月まで経過した時期に行うこととなっている²⁾。

■参考・引用

1) 国立感染症研究所：水痘とは

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/418-varicella-intro.html>

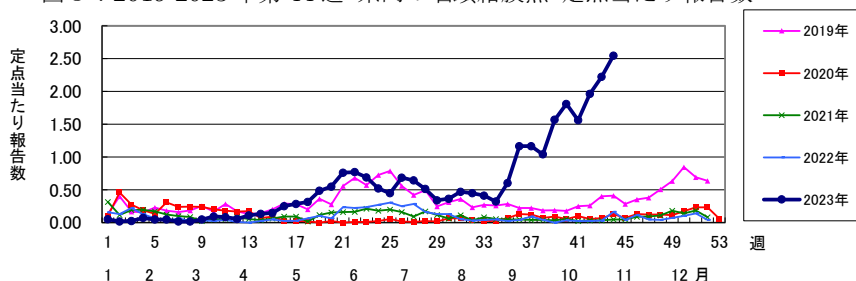
2) 厚生労働省：水痘

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekkaku-kansenshou/varicella/index.html

《咽頭結膜熱》

2023年第44週の県全体の咽頭結膜熱の定点当たり報告数は2.52(人)であった(図3)。2023年は第35週以降、定点当たり報告数が過去5年間と比較して多い。また、全国の発生状況も、第42週時点において過去10年の定点当たり報告数の中で最も多くなっている¹⁾。

図3：2019-2023年第44週 県内の咽頭結膜熱 定点当たり報告数



原因となるアデノウイルスは、接触感染及び飛沫感染するので、頻回の手指衛生対策等による感染対策が重要である。家庭内での感染を防ぐために、こまめに手洗いを実施し、タオル等は共有しないこと、ドアノブや手すり、おもちゃ等をこまめに次亜塩素酸ナトリウム等で清掃・消毒することが効果的である。なお、通常の消毒用アルコールは無効であり、注意が必要である。

■参考・引用

1) 厚生労働省・国立感染症研究所：IDWR 2023年第42号<注目すべき感染症> 咽頭結膜熱

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/adeno-pfc-m/adeno-pfc-idwrc/12351-idwrc-2342.html>

【新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の発生状況】

2023年第44週の県全体の定点当たり報告数は、前週の2.35人から減少し、2.05人であった。

地域別では、長生(3.43)、船橋市(3.12)、柏市(2.93)保健所管内で患者報告数が多かった(図)。

図：直近5週間の県内 COVID-19 定点当たり報告数の推移(保健所別)

